

移動する人々をめぐる論考からの類推より 考えられる「量子都市ガバナンス」の記述

谷村光浩

■もくじ

1. はじめに
2. 移動する人々を研究する枠組みの再考
3. 「ニュートン的な世界観」に根ざした描出から
4. 「ニュートニアン・パラダイム」に挑む思考
5. 「多“居住”/多アイデンティティ解釈」という読み解き方から

1. はじめに

今後さらに進展する「グローバル化・都市化をすべての人々のために」とする施策を、ことに人々の流動性も勘案して紡ぎ出していくには、これまでになくしなやかに「ガバナンス」を発想する必要に迫られている(谷村 2009, 51-52)。こうした問題意識から、いったん思い切って旧来のガバナンス論からは離れ、「物理学からの類推より‘考えられるガバナンス’の記述」(谷村 2009)を探ってきた⁽¹⁾。

この作業を展開する上で、ひとつの鍵となったのは、人々の「パラレル“居住”」というくらし方であったが、これは国際連合大学(UNU)学長室等での研究プロジェクトを通じて考察を進め(Tanimura 2005, 66-67; 2006, 276)、特に、“Beyond UN-Habitat’s Classic Framework in Urban Development Strategies”[国連ハビタットによる都市開発政策を越えて](Tanimura 2006)では、その具体的な事例を整理した後、これに対応しうるガバナンスとして、量子力学の「多世界解釈」にヒントをえた「量子都市ガバナンス」という試案を提起した。

そして、上述の“物理学からの類推より‘考えられるガバナンス’の記述”では、これら「パラ

レル“居住”」や「量子都市ガバナンス」の考えられる語義を推究し、暫定的に付した定義説明にも手を加えてきた(谷村 2009, 63)。関連する要語も含めて、はじめに提示しておきたい。

【パラレル“居住”】

「十分な解を確保するため、個人が複数のテリトリー/ノンテリトリー空間に“住まい”、各“居住”状態が量子力学的な重ね合わせ状態にあること」(63)をいう。

【量子都市ガバナンス】

「量子都市ガバナンス」とは、「みなし“定住”社会を近似計算で運営してきたニュートニアン・パラダイムを深化させ、パラレル“居住”の概念を契機に見えてきた複数の“居住”状態の重ね合わせ状態を、量子力学における多世界解釈にならない、多“居住”解釈(共存している“居住”状態の全体が実在していると理解)する都市ガバナンスの提案である」(63)。

【ニュートニアン都市ガバナンス】

古典力学から推しはかるこのガバナンスは、

以下の「固相」や「液相」の考え方を含め、その世界観は、最初に「不動で不変の“国民国家”という枠組み」を設定し、社会全体を国際機関、市民社会組織、企業市民等の「アクター」が織りなす精巧な機械のようにとらえ、人々の「定住」を支える基本法則が世界を支配しているとの見方といえよう。このニュートニアン・パラダイムは、社会を“近似的”に扱うのであれば有効との類推も成り立ちうる(62)。

……………
 ・「固体相[固相]のガバナンス」とは、「テリトリーをもとに定住者が編成する旧来の共同体、地方・中央政府という近代国民国家の構成要素を基軸にしたもので、これは、そうしたロジックの補強・強化を企図する国際機関やグローバル企業によっても共有される。なお、移住者は、唯一の最適解を求めて流入してきた新定住者との枠組みの中で処理される」(Tanimura 2006, 295; 谷村 2009, 51-52)。

……………
 ・「液体相[液相]のガバナンス」とは、「唯一の最適解として選択された定住地からグローバル空間を駆け回る人々や、そうした定住地を求めた移民が織りなすトランスナショナリズムのように、固体相[固相]の想定する静的枠組みを越え、地域共同体が複数の社会とのネットワーク状の関係性の中で編成されていくという、流動者からみた動的なとらえ方である」(Tanimura 2006, 295; 谷村 2009, 52)。

一連の考察をベースに、本論文では、次なる段階の作業として、移動する人々をめぐる広範な諸研究の視座、問題提起、新機軸などを、各々の含意や示唆も汲み取りながら整理し、さらに

はそうした論考からの類推より、「量子都市ガバナンス」論の構築にむけて、基礎的な検討を一層推し進める。なお、これまで論じてきた「“居住”状態」に加え、当該分野・関連領域の文献にてしきりに説かれる「アイデンティティ」も糸口に方途を探る。

本論文は、具体的には、移動する人々を研究する枠組みの抜本的再考を求める論述の概観と、そうした思索がなされるパラダイムの推察から着手する。次いで、移動する人々が、「ニュートニアン世界観」から描出されたと見てとれる「ディアスポラ」, 「トランスナショナリズム」, 「グローバル化と女性たちの越境」の論述を吟味した後、さらにはこうした「ニュートニアン・パラダイム」に挑む思考として、「“ものの見方”としてのディアスポラ」, 「差異と流動の哲学」, 「量子的な“私”」といった“いつもならぬ”視座からの考察も進める。そして、これらの考究をもとに、本論文の主要課題である「量子都市ガバナンス」の語義への補筆、またその核心部分である「“居住”状態」や「アイデンティティ」の“量子力学的なありよう”の解釈にあつては、古典力学的なとらえ方との“つぎはぎ”でもって編み出す「“居住”状態/アイデンティティの蓋然的解釈」を土台に、多世界解釈からの類推より「多“居住”/多アイデンティティ解釈」という考え方の提起を試みる。最後に、本研究が向かう今後のステップをごく手短かに付記する。

2. 移動する人々を研究する枠組みの再考

個々の営みにていかに多様な意味合いや条件などを含みもつ移動であろうが、これまでは、「多くの人々が繰り返して、しかも一定の規模で移動を行なう場合に、移民現象ととらえられ、その背景にある諸要因が分析され、[研究者は]パターンを読みとろうとしてきた」という(伊豫谷 2007, 5)。たとえば、『国際移民の時代』

(カースルズ & ミラー 1996, 26-27)では、一時的な移民から、家族の呼び寄せ、定住意識の高まり、そして永住へと、いわゆる「移民過程」が段階モデルとして描出されている。また、「労働移動」や「人口移動」という観点からは、期待賃金、家族構成員、労働市場の階層化などに着目した諸理論が展開されてきた(厳 2005, 12-23; 河野 2006, 13-18)。移動する人々の「物語」とは、つまるところ、流入先での「定住」、そして「市民化」や「同化」であり、欠けていた権利やサービスを手にできるようになることであった(伊豫谷 2007, 9; 翟・時他 2008, 210-211; 厳 2009, 166)。しかし、このような問いのたて方ではなく、「移動を論じるということは、…… 認識の枠組みを根底から転換すること…… 移動という観点から、これまでとは異なる何がみえてくるのかを考えること」との思索もみられる(伊豫谷 2007, 10)。

このセクションでは、これより、移動する人々を研究する枠組みの抜本的な問い直しとして、その核心にふれるとみられる「移民研究」を“アンラーニング学習棄却”する試み、人の移動とアイデンティティの生成に関して「唯一の私」とみるものが取り違える“私”という問題の提起、さらには「定住者の世界」を描き直す“オルタナティブな枠組み/世界”という視角を概観する。そして、これらを、試論として先に提示した“考えられるガバナンス”の視座に照らし合わせ、それぞれがどのようなパラダイムの論考なのかを見極め、整理してみたい。

2-1. 「移民研究」を“アンラーニング学習棄却”する試み

さまざまな研究領域にて人の移動が取り上げられるなか、移民研究の“方法”に関わる国際社会での再検討作業を注視してきた伊豫谷登士翁(2007, 3)は、「方法としての移民：移動から場をとらえる」において、「これまでの移民研究を学び捨てる(アンラーニング)」試みを通じた現

代移民研究の根本的な変革の必要性を提起している。

この移動・グローバルゼーション研究の先覚は、まず近代とは、しばしば「移動の自由」をうたいながらも、その範囲を国境を含む一定の区分けであらかじめ画定し、人々が「存在すべき場所」あるいは「戻るべき場所」がおのずと明らかな「定住」が「暗黙の前提」とされ、その浸透こそが「進歩」、「文明」と解されてきた時代と説く。「定住」がまさに人々の営為の「常態」、すなわち「あるべき姿」ととらえられる一方、「移動」とは、言わば「正常からの逸脱」、単に「一時的で例外的な出来事」、「仮の姿」で、そうした状態にある人たちは、いずれ定住すべき「野蛮で遅れた人々」とさえみなされたことと解き明かす(伊豫谷 2007, 3, 5-6)。

その上で、伊豫谷登士翁(2007, 9)は、旧来の移民研究については、「しばしば政策科学としての有用性に左右され、移民を政策の対象ととらえてきた」と看破し、そうした視座の核心を、次のように簡明に記している(3-4)。

「逸脱」を扱う移民研究の課題は、移民研究者の恣意性に任せられ、移民政策、移動の目的や動機、送り出し/受け入れ社会の変容など、移動がないと想定される場から取りあげられた。その恣意性を支えてきたのは、移動する人を、暗黙のうちに、しかも無自覚に、管理される対象と考えてきたことにある。移民を対象とする研究者は、安定した一定の領域、固定した場を正常な位置として想定し、移動する人を例外として観察してきたのである。

そして、「移動から空間を問う」というセクションで、移民研究の場こそ再考すべきとの見解を明確に打ち出すこの先駆者は、「場所をあらかじめ所与のものとして設定し、固定された

場から移動をとらえるのではなく、移動から場所をとらえ返し、移動の視点から社会あるいは世界と呼ばれてきたものを再構築する試みが必要とされている」と論じている(伊豫谷 2007, 10)。

さらに、論考の最後には、これから移民研究が具体的に課題として向き合うべきことは「ナショナルな枠組みに制約されてきた分析枠組みを問うことであり……すべての人々に通底する課題を扱うことを意味する」と結んでいる(伊豫谷 2007, 19)。

2-2. 「唯一の私」とみるものが取り違える“私”

「人はなぜ生まれた土地を離れ、境界を越えて移動するのか」という、至極当然に思われそうな問題設定の仕方についても、伊豫谷登士翁(2007, 8)は、「しかし、なぜ人は生まれた土地に特別な“愛着”を……もつと思われてきたのか。さらに、なぜ“移動すること”だけが問いとなるのか。移動する人々は、なぜアイデンティティを問い続けられるのか」とさらに掘り下げ、特にアイデンティティに関しては、「決して固定的であるわけではなく、ましてやナショナルなアイデンティティに収斂されるものでもないはずである」と述べている。

人の移動とアイデンティティの生成については、イタリア・サッサリ大学の A. メルレル(2006)が、「常態としての移動/移動の一場面としての“定住”」(63)との見方を糸口に、「混交し、混成し、重合する”移動からみたヨーロッパ”(67)の描出を通じて、数えきれないほどの「“複合し重合する私(io composito)”」(72)が生成されているという示唆に富む論述を展開している。

移動し続ける人々をみると、しばしば、“私”の中にすでに他者があるかのごとく、絶えず反目しあう「引き裂かれた私」, 「自分と和解しえない私」として存在するかのように解され、「エ

ンパワーメント」に根ざしたさまざまな支援策が講じられるが、「移動民」としての経験をみずからも有するこの地域社会学者は、「制度的なものであれ、個人的なものであれ、“引き裂かれた”“欠如した”存在であるという前提に立つ限りは、回復不可能なものに向かっての努力を強いるだけ」で、過誤が繰り返されかねないと危惧する(メルレル 2006, 71, 73)。

翻って、A. メルレル(2006)は、「“複数の私(io plurimo)”とは、……いくつもの体験が単にバラバラに“多元的”に投げ出されているのではなく、有機化しまとまりをもっているような、“一つとなった複数性(una pluralità)”によって構成されているところの、“複合し重合する私(io composito)”」(72)とした上で、「“唯一の私(io unico)”と考えるものにとっては、複数性を包含した一つの存在を表象することは困難で、それはただ“引き裂かれた”存在としてのみ理解され、……単一性のペルソナ(仮面)……は、“複合し重合する私”に痛苦をもたらし、この枠組みからの“出口”は、暴発、逸脱、精神病理しかないように思われがち」(73)と述べている。それから、この“複合し重合する私”という観点からは、「単一な世界」への収斂か「多文化共生社会」かという問いかけは意味をなさず、「新たに思考の枠組みを練り直し、……既存のあり方からみるなら決して正統でない、むしろ異端であるような応答を正統なものとしてしまう力」が求められるとも論じている(75-76)。

先頃、「ナイルが潤す国を揺るがした市民決起の意味」を考察する中東/イスラーム研究の碩学、板垣雄三(2011)も、きわめて示唆的な見方を提起している。歴史的に、移動する商人や商業化した農民をはじめとして、中東の人々が一ヨーロッパで考え出されたと一般に解されている近代市民社会/国民国家に先立ち—「都市的なネットワーク・パートナーシップの組織原理に基づいて暮らしてきた」(29)ことを踏まえ

たその視座は、次のように提示されている(25)。

私がかねがね、「n 地域」・「アイデンティティ複合」という二つの概念を提案してきました。「n 地域」は、人々が色々なサイズの、しかも同心円状でなく、アメーバ状にも飛び地方式でも拡がり繋がっていくような、〈地域〉を選び分けて生きること。〈地域〉は人がつねに可変的に組み換え、獲得しなおすもの、と見るのです。n の最小は個人の立脚点、最大は地球+a です。「アイデンティティ複合」は、人々が数多の「私」を選び分けながら生きること。自分の内面で様々な「私」を繋ぎ合わせるから、「私」をネットワーク化することです。アイデンティティが一つでなければ人格の分裂というわけではない。都市を生きるとは、アイデンティティの複合を生きることです。

そして、人々は「アイデンティティの重なりの中に生きています」(26)とも記述する著者は、「中東と世界の行方」を思索するにあたり、まずは国籍など「落ち着かぬアイデンティティの一つ」にすぎず、「いま中東に拡がる革命のなかでしばしば国旗が持ち出されるのは、抗議者から変革者へと変わる新しい“市民”(これも上記ワタシと関係する)の模索・獲得過程を特徴づけるアドホックな(臨時の)通過現象とみるべきでしょう」(26)と論じている。また、そうした「“市民”のあり方の新しい意味」(30)を勘考する際、ひとつの重要な糸口は、「タウヒード=“多即一”的な関係主義的全体論」(31)との視角も示されている⁽²⁾。

2-3. 「定住者の世界」を描き直す“オルタナティブな枠組み/世界”

ヨーロッパを「練り上げる」にあたって、A.メルレル(2006, 69, 76-77)は、「……重層的な

歴史を単純化して処理し、無数の固有性を初期化してしまう”のような枠組みによる普遍化、システム化がもつ危険性」への留意や、先にふれた「複数の文化の複合性・重合性をもった“複合し重合する私”との対話」や「協業」を、基本的な方針に掲げる。ただ、「複数の私」とは「社会規範から逸脱する危険性をかかえた、社会化されていない“闘争的な私(io conflittuale)”を意味するわけではない」(72)と述べていることから、その方面へ踏み込むことは回避したいとの心情が読みとれる。

また、「新しい“市民革命”の機軸」を探る板垣雄三(2011, 30-31)は、階級、民族、ジェンダーなど、旧来の「社会科学的分析軸」では人々を「部分的に理解できても全部はわからない事態」をまえにして、「多様に異なる個人・集団が水平的・多角的・分権的・共働的に協力する広範なネットワーク・パートナーシップを創成し、それが総体的な変革過程を生成していく」という、中東社会で実践されてきた「“市民”の運動」のなされ方にひとつの「斬新な姿」をみる。加えて、「修復的司法の思考法」をもとに、単に悪を残らず消し去るのでなく、悪に「矯正」への歩みを促すことも含め、「みんなで悪を抱えたことをプラスに転じる革命は、いかに可能なか」、その対話が求められているとも力説する。

一方、こうした言わば“規範的”世界からの視角とは興味深い対比をなす「漂泊者・移動者」のとらえ方もある。それは、『移動する人々と中国にみる多元的社会』の監修者で「全体結論」を担った中村則弘(2009, 299-302)が注目されるべき論考のひとつに掲げた王学泰の「遊民」研究と、それへの論評にみられる。まず、長年にわたり社会科学院にて文学・文化史研究にあたった王学泰は、『遊民文化与中国文化(遊民文化と中国文化)』(1999)にて、遊民・遊民知識人とは、儒家思想が説くような社会秩序から離脱した人々・知識人をさし、強い反社会性、社会

闘争における遊撃精神、徒党の重視、社会での希薄な役割意識がその特徴であると論じている。そして、中村則弘(2009, 302)は、要するに「中国文化はある種の非規範性を内包し続けてきたが、この遊民文化はそれを極端にまで推し進めたもの」との著者の見解を手際よく明示した後、次のように述べている(302-303)。

つまり中国においては歴史的にみて、……宗法・宗族にもとづく定住者の世界が、正当な社会秩序形成の基盤としてあった。その一方で、天災や凶作、さらには兵乱に起因して、それから遊離せざるを得なかった人々の受け皿として、……相互補完的なもう一つの世界があったのである。これこそが、漂泊・移動者の世界であり、極端な場合には「遊民」のそれとして現れ……[社会秩序が揺らいだ時には]新たな定住の秩序をつくるものとなっていた。……

さて、近代において形成された国家権力・市場経済にかかわる諸制度は、例外なき定住を基本に据えたものであり、人々に定住を強制するものであったといえる。……これはわれわれ自身における、生活の単一化、ダイナミズムの喪失に他ならない。

なお、中村則弘(2009, 311)は、「中国社会の多元性」を語るとは、民族や地域などの表層的な多彩さに留まらず、まさにこうした「もう一つの世界」の存在をも勘案することと指摘し、さらに「ここでは中国を素材としたが、漂泊者と定住者のダイナミズムは、少なくとも東アジアにおいては、かなりの広がりをもってみられてきた」と付言している。

2-4. いかなる“パラダイム”における問題提起なのか

これより、このセクションで概観した先学の論考を、【1. はじめに】に掲げた「固相」、「液相」の考え方を包含する「ニュートニアン都市ガバナンス」、さらには「量子都市ガバナンス」という視座に照らし合わせ、それぞれがいかなるパラダイムでの問題提起なのかを推しはかりながら整理してみたい。

まず、「学び捨てる」必要がある(伊豫谷 2007, 3)とされた旧来の“移民研究”については、ニュートニアン・パラダイム、特に「固相」の考え方に通じる“ものの見方”や要語が見てとれる。《ナショナルな枠組み》という“絶対空間・時間”をあらかじめ設定の上、《移動がないと想定される場から》さながら「対岸を眺めたニュートン」(都筑 2002, 143-144)のごとく一言うなれば「固定された一つの観客席から固定された一つの舞台を見る」(竹内 2004, 98)仕掛けで—ことに《正常からの逸脱》状態なる移動する人々が《管理される対象》として《観察》され、さらには個々の《送り出し/受け入れ社会の変容》が読みとられていく。《政策》分析を視野に、《労働》や《人口》という切り口で“近似的”にとらえられた移民は、《戻るべき場所》へ立ち返るのでなければ、流入先という新規に《存在すべき場所》に《定住》するために、《引き裂かれた/欠如した存在》たる《唯一の私》を高め、《市民化》、《同化》、《多文化共生》などの《物語》に滞りなく加わることを求められる。

“定住者”には至当と感じられそうなこうした考え方に対して、なぜ「移動すること」や移動する人々の「アイデンティティ」だけがことさらに取り上げられるのか(伊豫谷 2007, 8)との問いかけは、『量子力学のイデオロギー』にて佐藤文隆(1997, 61)がまさに投げかけた「では何故、虚数化に抵抗を感じたり、困惑したり……するのであろうか? この裏では“実数なら不

思議ではない”ということが前提にされている。しかし、果たしてそうであるかは検証をしてみる必要がある」との論考を思い起させる。もっとも、移民研究の場こそ再考すべき（伊豫谷 2007, 10）とのその問題提起は、量子力学のパラダイムにおいてではなく、ニュートンに相対したライプニッツの「絶対空間と時間の外枠（背景）を仮定することは、世界の事物そのものに内在しない、余分な区別を持ち込むことになるので……望ましくない」（内井 2007, 155）との意と重なる。

「常態としての移動/移動の一場面としての“定住”」（メルレル 2006, 63）や「n 地域」（板垣 2011, 25）という視角に関しては、「固相」の想定する静的枠組みを越えて、地域社会が複数の《地域》との《ネットワーク》状の関係性の中で紡ぎ出されるという、流動者からみた動的なとらえ方となる「液相」につながる。また、そうしたなかで生成されるアイデンティティについては、もっともらしくみえる《唯一の私》にかえて、《複数性を包含した一つの存在》としての《複合/重合する私》が語られる。つまるところ、いずれも“ニュートン”の眼で《観察》されているのだが、《重なりの中に》あって「《地域を選び分けて》生きる」/「《私を選び分けながら》生きる」（板垣 2011, 25）との記述を、かりに「量子力学的な重ね合わせ状態に」あって……と読み替えれば、量子力学と古典力学とのつぎはぎと評される“コペンハーゲン解釈”からの類推で案出した「“居住”状態の蓋然的解釈」—調査した瞬間に一つの“居住”状態のみ残り、その一つの“居住”状態以外は人為的に捨てる—（谷村 2009, 63）に近接し、「“居住”状態/アイデンティティの蓋然的解釈」（ここでの“/”とは“and/or”，すなわち“および/または”の意）という見方へと発展しうる。ただ、いずれにしても、《観察》時に《立脚点》として見出されなかった“居住”状態や際立ったアイデンティティと見極め

られなかった“私”は、虚ろなものと処理されかねない。あるいは、おおよそ予期されるそれらの《あり方》に比して、《観察》されたことがむしろ“些細なこと”とされるなら、《アドホックな[その時限りの]現象》とだけ解される恐れもあろう。

「……社会の《多元性》を語る」とは、《定住者の世界》とともに、「非規範性を内包」した「相互補完的なもう一つの世界」である《漂泊・移動者の世界》を合わせて読み解くこと（中村 2009, 302-303, 311）との論考にいたっては、“複数”の世界がとらえられている。しかし、その描出のされ方は、「量子力学的な重ね合わせ状態」としてではない。ここで打ち出された新機軸とは、言わば、“規範的”世界を「舞台」とみる研究者からは「舞台」の“袖/裏”と思われる領域までも取り込む奇抜な“舞台”設定であるが、それらはほかならぬ“ニュートン”の眼でもって《観察》される。そして、《遊民・遊民知識人》という一見「液相」とおぼしき“アクター”に仕分けして見出されるアイデンティティは、実のところある種の《唯一の私》であり、「固相」からの見方と通じる。

3. 「ニュートン的な世界観」に根ざした描出から

これより、移動する人々が「対岸を眺めたニュートン」（都筑 2002, 143-144）のような視角から描き出されたと見てとれる「ディアスポラ」、 「トランスナショナリズム」、 「グローバル化と女性たちの越境」をまずは概観する。そして、ことに「“居住”状態」や「アイデンティティ」について、先覚の読み解き方にみられる要点を簡潔に整理してみたい。

3-1. ディアスポラ

「移民の比較社会学」という観点から“ディア

スポラ”に着目した R. コーエンは(駒井・江成 2009, 21), その著書『グローバル・ディアスポラ』(原書 1997/角谷訳 2001)の冒頭, みずからが編者を担う「ディアスポラ・シリーズ」の紹介において, 次のように述べている(3)。

..... 移民が彼らの祖国に対してのみ忠誠心を示すという仮定は, 今では通用しなくなっている。..... 研究者は, 国家を超えるこうした複雑なアイデンティティを理解するためには, 新たな概念のもとに地図を書き直し, ケーススタディをやり直さなくてはならない。このとき, 「ディアスポラ」という..... 概念がその枠組みを提供してくれるだろう。この言葉にはしばしば悲劇的な離散というイメージが伴うが, 解釈を広げて交易, 帝国, 労働, 文化といった修飾語をつけ加えれば, 移民の祖国とかれらの現在の仕事の場であり定住の場である社会との間に, しばしば肯定的な関係があることについて, より具体的に理解できるだろう。

なお, この「修飾語付きディアスポラ」(62)という“分類”については, 実際には「種類の境界線がもっと曖昧で..... 二重, 三重の形態をとる集団もあれば, 時代によってその性質を変化させてきた集団もある」(13)と断った上で, 著者はそれぞれの代表例とみるエスニック集団を考察し, そのディアスポラ学を取りまとめている(ch. 8)。監訳にあたった国際社会学者の駒井洋(2001, iv-v)は, 「本書が提示するディアスポラの定義は, 今後の議論の出発点となるだろう。..... これまで労働の側面だけが強調されがちであった国際移民の性格について, 新しい視点を打ち出している」と評している。

いずれにせよ, この“ディアスポラ”においては, 愛着のある「祖国」と移民先の「定住の場である社会」との関係が探究されるが, 激しく

変動する国際社会には, そうした図式を単純に適用することが躊躇される事例もみられる。たとえば, 韓国に居住する中国・山東省出身の中華民国籍を有する「韓国華僑」の研究を進めてきた王恩美(2009)は, かつて反共体制のもと, 「故郷」が手の届かないばかりか受け入れることができない「外なる」存在となり, 「祖国」をそれまで無縁の地で愛着などわかずとも参政権が保障された中華民国とみた華僑社会の構造をまずは解明し, 近年は「中華民国の台湾化と華僑政策の変化」(277)などにともない, その「祖国」が「外なる」存在に反転していく過程を論考している。

華僑・華人の変容する越境形態を読み解き, 「漂泊」を“ディアスポラ”の適訳と唱える陳天璽(2008)は, 「故郷に帰るか, もしくは, 移住先に根を生やすか」(298)という旧来の構図にとらわれず, むしろ何らかの縁が生じた地を, 時に排除の力学にさらされながらも行き来しているうちに, 「各地に拠点を築き国境を越えた複数の基盤を持つようになる」(298)くらしの状態を, 国家の枠組みとは異なる「トランスナショナルな世界観」(305)から描き出す必要性を論じている。

また, 中国系ムスリムの移民研究を展開してきた木村自(2009)は, “ディアスポラ”とは, 国民国家の境界を越えてなお現れる「画一化されたイデオロギー」に根ざした「想像の共同体」ではなく(255, 257), さりとて一体性や均質性にかえて提示された「異種混濁性[ハイブリディティ]のみによって規定される主体のありようでもない」(257)と手際よく論点を整理した後, “ディアスポラ”という「共同体」をとらえるには, それぞれの状況に応じた—ときに矛盾さえする—「多様なロジックの共存」(257)を, まずは解することが重要と結んでいる。

もっとも, 近年, 移民を受け入れる国家や開発に取り組む国際社会という「想像の共同体」

の青写真を描くことに注力する研究者は、祖国との関係を保持するディアスポラを—その「デュアル/ハイブリッド・アイデンティティ」にも言及しながら—、新たに重要な非国家アクターとして見出している (Brinkerhoff 2008, 1, 5; Esman 2009, 7-8)。コーネル大学名誉教授 M. エスマン (Esman 2009) は、先にふれた R. コーエンの「修飾語付きディアスポラ」を、移民がホスト国で果たす“機能”をもとに人種、労働、起業の3分類に改め (15, 167)、勢力図の反転、主流派への統合、消滅などの見通しを論じている (179-180)。また、故国への送金や知の移転など、ディアスポラの潜在力に着目する J. ブリンカーホフの研究グループは、援助分野にてパートナーシップ、イネープリング環境の整備など、その活用にむけた具体策を提言している (Brinkerhoff 2008, 15; Orozco 2008, 207, 211)⁽³⁾。

3-2. トランスナショナリズム

『地域社会学講座』が重点テーマのひとつに掲げた「移動から見た地域社会」にて、「トランスナショナリズム」を論述の中核にすえた広田康生 (2006) は、越境移動者やその営みを知るには、社会人類学者の N. G. シラーらのとらえ方が有用であると、次のように引いている (84)。

「われわれはトランスナショナリズムを、移民が自らの出身国家と定住する国家とのあいだを繋ぐ社会的領域をつくり出す過程の総体として定義したい。こうした社会的領域をつくり出す移民たちはトランスマイグラン[ツ] (transmigrant[s]) と呼ばれる。彼らは、重層的な関係性—家族同士の関係、経済的な関係、社会的な関係、組織的な関係、宗教的な関係、そして国境を繋ぐ政治的な関係—をつくり出し、維持する。トランスマイグラン[ツ] は、彼ら自身を二つもしくはそれ以上の社会

に結びつける社会的なネットワークのなかで、特有のアイデンティティを発展させ、さまざまな関心を持ち、さまざまな行為を実践する」 (Glick-Schiller, Basch and Blanc, 1992: 1-2)。

そして、この「社会的領域」については、トランスナショナルな公共圏 (public sphere) が創出され、移民に「双方の世界」での活動を可能にしていると指摘する文化人類学者 P. レビット (Levitt 2001) の論考ももとに、「トランスナショナリズム論は、それぞれの場所に係留しながら既存の制度的世界に重なるさまざまな“もう一つの公的世界”の存在という問題を浮かび上がらせ、現在われわれが日常のなかで接する越境移動者の意味についてもこのような社会空間の展開を背景におかなければ理解できないことを主張している点で重要である」と述べている (広田 2006, 85)。

もっとも、移民が「定住する国家」という先の記述に関して、中国系移住者のトランスナショナルな展開を考察する田嶋淳子 (2008) は、「移住プロセスの最終的な帰結が受け入れ社会における定住 (settlement) とは限らない」 (224) と指摘している。たとえば、国籍等を取得した移住先の日本と、帰郷ではなく戦略的に「再移住」した母国のいずれにも家族と住まいをもって頻繁に往来し (230-231)、情報環境の進展もあいまって、日常的に「郷里の生活の中に日本があり、日本社会での……生活の中に母国がある」 (240) くらいの状態が見出されている。いわゆるトランスナショナルに複数の生活拠点を行き来する「シャトル移民」 (伊豫谷 2001, 237) の形態である。

また、「滞日中国人」の生活実態や重層的なアイデンティティを探る坪谷美欧子 (2008) は、「永住段階にみえても、本人の主観としての“仮住まいである”“いつかは帰国する”という意識は

やはり無視することはできないだろう」(33)と、「トランスナショナリズム」研究からの示唆を汲みながらも、「ソジョナー」(一時的な滞在者)と「定住者」との中間的存在とされる「永続的ソジョナー」という概念を手がかりに、その生き方をとらえようとしている(12, 29-34)。

なお、このように複数の国家にまたがった一同時に帰属する一存在である移民が、社会の重なり合いを生み、それぞれの内側から作用する現象については、「トランスナショナル政治」として澤江史子(2009)が論述している。移民側からは、ホスト社会での地位や権利の確保、利益の拡大にむけて、ホスト国と出身国の双方に政治的要求がなされるが、アイデンティティの多様化とともに、出身国政府へは「単なる保護や支援だけでなく、出身国の……国家のあり方やイデオロギーにかかわることにまで拡散」(44)、出身国側は移民を経済・外交的に「“在外資産”として活用する」(43)にも、移民社会への政治的宣伝などをあわせて求められていると概説する(44)。

ときに、メディア社会学を専攻する藤田結子(2008)は、越境空間で活動する移住者の状況が「トランスナショナリズム」によって、また複数の国に拠点(故郷)を持つことから生ずる「多元的・多層的な意識」が「トランスナショナル・アイデンティティ」によって解き明かされるなか、B. アンダーソンがいう「遠隔地ナショナリズム」—受け入れ国にはほとんど愛着を抱かず、むしろメディアを通じてごく身近に母国を想像し、その一員としてのアイデンティティを絶えず抱く人々の考え—をも視野に考察を深める必要性を提起している(19-21, 190-191)。

いずれにせよ、どれも「国」に依拠した思索に留まる。ヨーロッパの都市を事例に論考するF. エル・タイェブ(2007)は、送り出し国と受け入れ国という従来の構図をこえて、「複数の移民の受け入れ国の間で……コミュニティ同士

を結びつけるような、トランスローカルな構造」(205)が形成されていることを注視し、さらには「固定的な実体としてではなく、プロセスとしてのコミュニティ」(208)という見方を提示している。

3-3. グローバル化と女性たちの越境

国際移動を題材に「ジェンダー研究のフロンティア」を拓く事業に傾注してきた足立眞理子(2008)は、現代のグローバル化の最深部をとらえるには、新自由主義思想とそれへの対抗運動など「生産領域のグローバル化の二重・対抗性」(225)を注視するだけでは不十分で、「再生産領域[生命・人間・労働力の再生産に関わる領域]のグローバル化」(235)という視角からの論考がきわめて重要と主張する。そして、ことに世帯組織は、「常にその状況に応じて、境界を変容させ、人々の〈未来への期待〉と〈合理性への判断〉によって組み替えられていくとみなすべきではなかろうか」(241)とも述べている。そうした「再生産領域のグローバル化」については、伊豫谷登志翁(2011)が、この新しさとは、(1)福祉国家の解体にともなうナショナルな一閉じた枠組みを前提とする—再生産領域の崩壊、(2)ネオリベラリズム(実際には国家による間接的管理)のもとで徹底される再生産領域—ケア・家事労働—の市場化、(3)再生産領域を担う女性労働力のグローバル規模での発見—無尽蔵の動員が可能に—と解き明かす(300, 303-308, 311 n. 25)。

さて、「女はどこにいるのか」(『現代思想』Vol. 33-10, 青土社)。このように問いかける特集の「移動する」のセクションには、「移動のなかへの定住」(M. Morokvasic 2004, “Settled in Mobility”, *Feminist Review*, Vol. 77, pp. 7-25. 本山央子訳)という示唆に富む論述が所収されている。ポーランド移民を「観察」してきたM. モロクワシチ(2005)は、往復運動の形態をとる

女性たちの束の間の越境—ともすると、長期にわたる持続的なつながりに関心を寄せる「トランスナショナリズム」においては看過されかねない現象(155)—を、次のように描き出している(162)。

海外通勤する多くのポーランド女性は、家事労働や高齢者ケアなどの再生産労働に従事している。数人でローテーションを組むことで、彼女たちは自分たちの家族のケアも続けることができる。〔移動先での〕賃金が支払われる再生産労働と〔自国での〕不払い再生産労働に関わる機会を最適化し、障害を最小化するためにポーランドの女性たちが作り上げたこの機能的な「自主管理」ローテーションシステムは、メンバー間の連帯と互恵、信頼によって成り立っている。……

ローテーションシステムは、女性たちが「こちら」の生活と「あちら」の生活をつなぎ合わせ、トランスナショナルな二重の存在〔double presence〕であることを可能にするだけでなく、さらに行為主体性の機会を作り出すことができる。

このように海外移住を選ばず、短期的な越境を繰り返す—「移動の中に定住する」(157)—ことで、自国での生活の質的な維持・向上をはかる人々を、著者は「二つの世界の中で/間で生きている」(161)とも記述している。

翻って、国境を越えて「複数の拠点を持つ家族(multi-sited family)」が形成される過程を「在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち」を事例に考察した工藤正子(2008)は、「結婚初期から出産・子育てをへて、女性たちの周囲には重層的世界が構成され、その重なり合いによって、複雑な自己変容のプロセスが進行している」(243)ことを見出す。複層的と表さなかったの

は、「女性たちが日常的に境界を越えていくだけでなく、層と層をつなぐ媒介役割をも担うことによって、それら複数の層は互いに自律的に存在するのではなく、重なり合い、影響し合うから」(247)という。そして、「多元化する社会に生きる個は、……単に状況によって切り替えていく複数のアイデンティティを形成するだけでなく、その間を媒介する能力を養うことによって、自らを取り巻く関係性に対する新たな視野を切り拓いている」(248)とも論じている。

なお、国際競争力の保持を目論む国家・地域の経済政策という在来の視角から「ケアと移住労働者」をとらえる安里和晃(2009)は、シンガポールや香港を事例に「女性の高学歴化・高所得化と〔外国人〕家事労働者の雇用は、女性にとっても国家にとっても好都合であった」(93)と読み解き、さらに、今後の高齢社会とケアの担い手問題を視野に政策の選択肢は多い方がよく、移民や外国人労働者の包摂も考えられると結んでいる(104)。他方、送出側フィリピンの国家戦略を考察する小ヶ谷千穂(2009)は、海外労働者の権利保護を求める移住労働NGOも「技能化」という新自由主義的な政策に囚らずも加担してきた(94, 109)と指摘するとともに、在外投票を含め、「在外国民を国家開発に十全に取り込もうとする」(110)送り出し国の企図にも言及している。

3-4. 「ニュートン的な世界観」から描出される

「居住」状態や「アイデンティティ」とは移動する人々を、「対岸を眺めたニュートン」(都筑 2002, 143-144)のような視角からとらえたと見てとれる論考を概観してきた。確かに、注視すべきと喚起したい《対象》—何らかの際立った点で“恣意的”に識別された目当てのもの—を、「対岸」を見る眼で《観察》して子細に描き出そうとする姿勢は、いずれにも通底していた。また、「固相」の一属性と推しはかりうる

B. アンダーソンの「遠隔地ナショナリズム」はもとより、「液相」にて《トランスナショナリズム》をはじめ流動者からみた動的なとらえ方が提起されても、《国際移動/移民》、《出身/ホスト国》、《越境》などの要語にて表されるように、基本的には《ナショナルな枠組み》という“絶対空間・時間”が前提とされる思索であった。

その上で、移動する人々の「居住」状態に関しては、まずは「どこにいるのか」、いかなる移動《パターン》であるのかを明らかにすることに、まさに主眼がおかれていた。《祖国》を離れ《定住の場である社会/ホスト国》にくらすとの記述では言うまでもなく、《定住とは限らない》で《国境を越えた複数の基盤/生活拠点》を《頻繁に往来/往復/行き来/シャトル/ローテーション》して《重層的/双方の世界》を生きていると指摘されても、“粒子”のごとき人は、《観察》時の所在地一概して所在国—と結びつけて語られていく。たとえば、《対象》とする人が日本で《観察》されたなら《在日》、《滞日》などと、その「居住」状態は、《既存》とされる制度的枠組みに則して、やはり“近似的”にしか表されない。

「アイデンティティ」については、《想像の共同体》としての国家やエスニック集団を基底に、「液相」の見方から《デュアル/ハイブリッド・アイデンティティ》、《トランスナショナル・アイデンティティ》など《複雑な/特有の》とされるアイデンティティが、または「固相」の枠から外れることなく、《母国……の一員》《□□人/僑》としてのアイデンティティが、あたかも比類なく核心をついたかのように論考されていく。さらには、《観察》する者の関心に応じて、移動する人々の“私”とは《移民》《労働者》《女性/妻》などともあらかじめ定められ、しばしば先述の《出身国》名や《在/滞□□》に続けて表記される。

“ニュートン”の眼で《観察》する研究者が展

開してきた作業とは、さながら、「19世紀の末にいたるまで、……宇宙全体は壮大な時計仕掛と考えられ、この仕掛の精巧なからくりを、……どこまでも詳細に調べることができる」（リンドリー 1997, 16）と考えた物理学者のごとく、変わりゆく現代社会の「新しい歯車」とおぼしきものを丹念に探ることといえるかもしれない（谷村 2009, 62）。「修飾語付きディアスポラ」（コーエン 2001, 62）、「中間的存在」という「永続的ソジョナー」（坪谷 2008）など、より細かな《分類》を視野に《観察》を進め、またもや“近似的に”整理された《類型》は、いずれもニュートニアン・パラダイムで創出された知と解せる。政策上《好都合》な「歯車」は、ときに新機軸を担う《アクター》として注目されるが、「トランスナショナル政治」（澤江 2009）とは、新旧「歯車」が織りなす「時計仕掛」という様相に照らして読み解くこともできよう。

なお、先のセクションの考察では、「居住」状態/アイデンティティの蓋然的解釈を述べたが、そうした見地につながりうる側面もみられる。“ディアスポラ”をめぐって、《一体性や均質性》でなく、さりとて《異種混淆性》だけでもないと木村自（2009, 257）が提起する「多様なロジックの共存」、《往復運動》する女性たちを事例に M. モロクワシチ（2005, 162）が指摘する「トランスナショナルな二重的存在」、《複数の拠点を持つ家族》に着目した工藤正子（2008, 243, 248）が力説する「重層的世界」やそれを生きる人々の「状況によって切り替えていく複数のアイデンティティ」と「その間を媒介する能力」などをさらに推しはかってみたい。こららの見方に通底するのは、「量子力学的な重ね合わせ状態」がおそらくは感じ取られていながらも、いったん《観察》という作業がなされると、“コペンハーゲン解釈”にもとづくかのように、共存している複数の“居住”状態/アイデンティティの中からいずれかが選び出され、そのひと

つ以外はひとまず捨てられるとの方策である。そして、論述の際には、幾度かの《観察》を通じて見出された典型例が、まずは個々のものとして取り上げられ、それからそれらの《重なり合い》が描出されるというまとめ方である。「状況によって切り替えていく」との記述にも、言うなれば《観察》時に“波の収縮”が仮定されていると読みとれ、そのような解釈からは、必然的に、「その間を……」という作為的な表現が導き出されることになるのであろう。

4. 「ニュートニアン・パラダイム」に挑む思考

このセクションでは、いよいよ「ニュートニアン・パラダイム」に挑む思考として、「ものの方の見方」としてのディアスポラ、「差異と流動の哲学」、「量子的な“私”」といった—“常と異なる”と感じ取られるかもしれない—視座を概観する。そして、ここでも「“居住”状態」や「アイデンティティ」に関して、それらが描出される際の要点を簡潔に整理してみたい。

4-1. “ものの方の見方”としてのディアスポラ

「現代思想のキーワード」（『現代思想』Vol. 28-3、青土社）として、カルチュラル・スタディーズの視角から「ディアスポラ」を解説する上野俊哉(2000)は、その理論的な核心を、先述の R. コーエンの「修飾語付きディアスポラ」にみられるような分類による概念化とは異なり、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル理論の思想家である P. ギルロイを引きながら、「様々なディアスポラ現象のなかに、資本主義的ヘゲモニー、労働至上主義(生産力主義)、ジェンダーや“人種”による分業、それらを支える国家主義……」といった要素を批判し、それらに抵抗していく契機を見いだすこと」(47)と記している。そして、『ディアスポラの

思考』(上野 1999)において、ディアスポラは近代性(現代性)そのものの中におのずから存在している「別の思考と経験」(250)と結ぶ著者は、それを次のようにも論述している(33)。

仕方なく強制された移動の結果としてもたらされた文化のなかで生まれた考え方がディアスポラの思考なのでは必ずしもない。むしろ、ある特定の考え方をとったがゆえに普通の考え方や生き方にはまらない、そこから抜け出すような身ぶり、行動を選択する人間が紡ぎだしていく思考こそがディアスポラの思考なのではあるまいか。批評的(批判的)に考える者は、否応なく、その意識に関わりなくその場所を[たとえば国家的時空から]動かざるをえない……。

ディアスポラのアイデンティティとは、「想像の共同体を別の方向に……編みなおすようなネットワーク」で、言わば「トランスローカル」とでも称すべき特徴をそなえ(上野・毛利 2000, 200)、複数的で、さらには構築されるのみならず、絶えず更新プロセスにあるものとして、「燦火のほむら」のごとき「^{チェンジング・セイム}変容する同[じもの]」とも説き明かしている(上野 1999, 81; 上野・毛利 2000, 201)。

このような“ものの方の見方”としてのディアスポラについては、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の R. ブルーベイカーも、「“ディアスポラ”のディアスポラ」(原書 2005/赤尾訳 2009)で、「実体か、それとも^{スタンス}態度か」(392)という考察を進めている。近年、「ディアスポラ」という用語が増殖し、意味の拡散が生じているが、その基本的な要素は、(1)空間上の離散、(2)「郷土」志向、(3)境界の維持と簡潔に整理した上で(382)、まず国民、エスニック集団などと同様に「実体」として語られるディアスポラとは、単一のアクターとして見出され、個々に成員が数

え上げられるものと記している(393)。著者は、境界づけられた実体への代替案を提起するような異種混淆性などの概念においてさえ、個々に共同体・アイデンティティを持つと語られる際、いずれにしても、根本的には「集団主義」の力学が生じていると看破する(395-396)。そして、次のような「^{スタンス}態度」としてのディアスポラの重要性を論じている(396)。

こうした集団主義の問題を克服するためにも、われわれはディアスポラを、実質的観点から境界づけられた実体とみなすのではなく、むしろイデオロム、^{スタンス}態度、主張などとみなすべきではなかろうか。ディアスポラは第一に実践のカテゴリーとして捉えるべきであり、その上ではじめて、ディアスポラが分析のカテゴリーとして実り多い形で用いられるか否か、また、どうすればそのように用いられるか、といった問いを立てるべきなのだ。……ディアスポラは、往々にして強烈な規範上の変更を伴ったカテゴリーである。ディアスポラは、世界を記述するというよりは、世界を作り直そうとする。(傍点原著者)

R. ブルーベイカーは、「ディアスポラ」の理論家が本質主義的な想定に根ざした「目覚める」という言葉遣いに陥ってしまっはならないと注意を喚起する(398-399)。

ちなみに、ユダヤ/イスラエルに関わる難問などを含め、ヨーロッパ近代社会思想史を探究する早尾貴紀(2009)の問いは、本来の状態からの「逸脱」とみなされてしまうディアスポラとは何かではなく、まさに「無色透明な装い」をした「本来性」, 「本来的国民」とは実際には何なのかにむけられる(166-167)。今なお「ヘーゲルの思想圏の内部にいる」(168)と目されるなか、「近代世界を支える認識論的な基礎」が、国家なる「絶対的空間」の想定、単線的な発展

を遂げていくという「進歩史観」によって規定されることがあるが(170-171)、ディアスポラ思想とは、「国民国家」を、ひいては無意識のうちに思い浮かべられている「国民の本来性を批判し続けている」(205)との考察がなされている。

4-2. 差異と流動の哲学

文芸評論家の竹田青嗣(1990)は、反・人間中心主義, 反・西欧中心主義, 反・理性中心主義を掲げる「ポスト構造主義の挑戦」を概説するにあたり、その前書きに「デリダの〈^{デコンストラクション}脱構築〉, ドゥルーズの〈リゾーム, 多数多様体〉という現代的概念は、普遍的な〈意味〉を立てて、そこから出発することのゆきづまりと困難さを直観した、叫びに似ている」(182)と端的に記している。なぜ世界が存在し、なにゆえ人間は生きているのか。「神」によらず、「理性」をもとに合理的、普遍的な認識が可能との確信の上に立つ近代社会にあって、その完全な答えを追い求める「近代的な〈知〉(形而上学・弁証法)の欲望」が、「つねに世界を整理されたものとして見ようとする一種の弱さ(傍点原著者)」(192)と密接に結びついてきたとのドゥルーズの視角は、ニーチェからの系譜より解き明かされていく(191-192)。「ポスト構造主義」の基本的な枠組みとは、まさに、そうした人間の「知」のあり方を根底から問い直そうとするもので、「決してたんに新しい世界観を提示するものではない」(193)と結ばれている。

『哲学の歴史』(鷲田清一編, 中央公論新社)にて、第12巻「総論 モダンとポストモダン」を担った篠原資明(2008)は、「ポスト構造主義」, ことにドゥルーズの思想が、差異を“A”と“非A”という否定的なものとの二項対立ではなく、差異をそれ自体における[強度的]差異として肯定的なかたちでとらえようとするところから始まったことを教示している(26-27)。そして、

G. ドゥルーズ著『差異と反復』（原書 1968/財津訳 1992）へと誘う澤野雅樹（2004）は、その「差異」を、次のように簡潔に解説する（217）。

…… 差異は否定や対立と混同されてはならず、強度は特定の尺度や度合いと混同されてはならない。「強度の差異」は原理的に感じる事が不可能なものであり、それは差異がまだ何ものとの差異をも形成しておらず、それゆえ一切が潜在的な状態にとどまっているからである。我々が何ものかを知るためには差異が縮減され、あるものがそれと認められるまで差異が差し引かれていなければならない。それゆえ強度とは…… 何一つ感じる事が出来ない潜在的な状態を指す概念なのである。

この潜在的ヴィルチュエルという言葉遣いについて、ドゥルーズ（1992）は、「潜在的なものは、実在的なものには対立せず、ただアクチュアルなものに対立するだけである。潜在的なものは、潜在的なものであるかぎりにおいて、或る十全な実在性を保持しているのである（傍点原著者）」（315）という。

そして、この『差異と反復』では、オルタナティブな選択肢として、「ノマド（遊牧民）的なあり方」が提起されている。篠原資明（2008）は、「ドゥルーズは、定住的配分に対比して、ノマド的配分を語る。定住的配分が、同一性[*identité*]と表象＝再現前化[*représentation*]に服するかぎりでの存在の配分を表すとすれば、ノマド的配分とは、位階化されないアナーキーな配分のあり方を言う」（40）と要点を整理してみせる。また、ドゥルーズの「流動の哲学」を描き出す宇野邦一（2001）は、ノマド的配分の思考とは、何がしか「同じもの」（表象）によって「樹木のように、幹から枝へと序列化された分類表に差異を配分する」（92）仕方を退け、「あらゆる

差異を過剰なほどに肯定し、開放しようとする」（94）目論みと読み解いていく。

なお、ノマドをめぐるのは、F. ガタリとの共著『千のプラトー』（原書 1980/宇野他訳 1994）に、遊牧民が移動する地点はすべて中継点としてしか存在せず、その営みは「間奏曲」であり（436）、さらに彼らは「一つの平滑[滑らかな]空間を保持し、そこを立ち退かないことによって、…… 遊牧民となる」（538）とも記されている。そして、都市という条里[区分された]空間でさえ、平滑的に住まい、その場で「遊牧民となる」ことができるなど、対立項なるものの混合、移行、重なり合いも語られている（537-539）。

このような「ノマド（遊牧民）となる」思考については、懸念の声も寄せられている。カルチュラル・スタディーズの上野俊哉・毛利嘉孝（2000, 204-205）は、「ディアスポラになる」もまたしかり、「ある種の問題や立場のロマン化」につきまとう理論的な罠に陥らぬようにすべきと指摘する。また、フェミニズム理論の社会的研究を展開してきたC. カプラン（原書 1996/村山訳 2003）は、ドゥルーズらの持ち出した砂漠などの「比喩的写像」が、まさに「ある種の植民地主義的言説の延命」（164）につながっているとも批評する。

4-3. 量子的な“私”

先に「ノマドとなる」思考に着目したが、それではその“私”とは、どのように語られうるのか。「特集ドゥルーズの哲学」（『現代思想』Vol. 30-10, 青土社）にて、まさに「ドゥルーズ的主体とはなにか」をテーマに掲げる大塚直子（2002）は、つねに同一性が保証された「固定的な〈私〉」、またいかなる変化も受けることなく存続する「考える《私》」—デカルトのコギト—が退けられ（214-215）、差異を肯定して、潜在的なものの現実化という図式にしたがって展開されるドゥルーズの主体論を浮かび上がらせる

(217, 220)。そして、その「〈私〉の複数性」とは、次のように述べられている(225)。

出来事に応じてその都度生まれ変わってゆく〈此性〉^{〔このものの性〕} [ひとつの〈私〉]を肯定し、その場かぎりの個の在り方を受け入れることは、同一的で固定的な自我から逃走することである。神秘的な永遠性によって保証された《私》とは、もはや幻想でしかないのだ。いまや、コギトはひび割れている。そこに時間が流入することによって、自我は可變的で偶然的なものとなる。

偶然の出会いのなかで、いかに襲[潜在的なもの]が折り上げられ、折り畳まれるか。ひとが主体となるのは、こうした襲の作用によってであり、したがって、そこには不変的で真なる自我が介入する余地はない。

さらには、興味深いことに、気鋭の物理学者のなかにも、「意識の量子力学的理論」の提起がみられる。哲学、宗教学にも造詣が深いD.ゾーハーは、その著『クォンタム・セルフ[量子的自己]』(原書1990/中島訳1991)にて、意識についても物質のように「量子的実在」—その実在の基礎は「不確定な確率の迷路」—からの描出を試み(21, 30)、粒子/波動の二重性に照らして次のように表している(184)。

量子的物質の粒子相は、個々のものを、すなわちどんなに短時間でも何とか固定できアイデンティティを持つことができるものを生み出す。波動相は、これらの個々のものの間の関係を生み、その結果、構成要素の波動関数の重合を通じて新しい個々のものを生み出す。波動関数は重なり合いもつれ合うことができるため、量子システムはお互いの中に「入り込み」…… 創造的な内的関係を作り上げる

ことができるのである。

このように量子力学をもとに人間の「意識」のあり方を推しはかっていると、「私は私(全ての私の下位自己の統一体)」であるばかりか、「私はまた私—あなた(あなたとの統一体)でもある」という(208)。この「あなた」には、「過去の人々—死者たち—」も含まれ、「回想するということ」でなく、私が(一部)彼らであるということなのである(傍点原著者)」(206)と、歴史のなかに織り込まれた“私”/“私たち”自身が見出されている(206, 208)。

4-4. 「ニュートニアン・パラダイム」に挑む思考にて「居住」状態や「アイデンティティ」とは

移民研究の場こそ再考すべきという伊豫谷登士翁(2007, 10)の見解とニュートンに相対したライブニッツの考え(内井2007, 155)との重なりを先に述べたが、そうしたつながりは、「“ものの見方”としてのディアスポラ」にも当てはまる。《国民国家》《国家主義》《本来の国民》をはじめとして、概して《ナショナルな枠組み》という“絶対空間・時間”に根ざした—ときに《目覚める》という要語さえ添えられる—言説が、《批判的》にとらえられていく。もっとも、この《態度^{ステンス}》としてのディアスポラでは、何にもまして「世界を作り直そうとする」《実践》の重要性も説かれていた(ブルーベイカー2009, 396)。

そうした“闘い”が基調であるならば、《ナショナル》を土台に組み立てられた《トランスナショナル》にならうかのようにもみられてしまう「トランスローカル」(上野・毛利2000, 200)という描出では、いささか危うくはないか。いつしか《本来的》な《ローカル》とつなぎ合わされ、思ってもみない曲解をされかねない。《動かざるをえない》人の“交渉の場”をいかに表すのか、

容易ならぬ課題を抱えているように見受けられる。また、「変容する同[じもの]」については、「不変の本質」ではなく、「物体化されないまま再プロセス化を繰り返している」（上野 1999, 81）とも説き明かされるように、その《同》とは単に《複数性》をそなえた《一つの存在》のことでない。とはいえ、これもややもすれば《本来的》な《一》なるものが作用するからくりに取り込まれかねない悩ましい言葉遣いである。いずれにせよ、あえて《(トランス)ローカル》、《同》にこだわるなかでの《抵抗/実践》の思考とみるべきなのであろう。

さて、「ニュートニアン・パラダイム」に挑むもうひとつの読み解き方は、「差異と流動の哲学」と「量子的な“私”」に通ずる「量子力学」からの思案である。ドゥルーズの要言によると、《潜在的なもの》は《実在性》を保持しているとはいいが、「《差異》が《縮減》され、あるものがそれと認められる」（澤野 2004, 217）とのことから、《観察》した瞬間に着目すれば、“波の収縮”を仮定、ひとつの状態以外は人為的に捨てる、いわゆる“コペンハーゲン解釈”が“ひな型”とされているように見受けられる。「意識の量子力学的理論」を掲げるゾーハー(1991, 30)も、実在性に言及しながらも、その基礎は「《不確定な確率》の迷路」というように、そうした解釈に特有の術語を用いている。

そこで、これまでに論じてきた“コペンハーゲン解釈”からの類推による「“居住”状態/アイデンティティの蓋然的解釈」を練り上げるのにも有用な示唆を、折よくえてみたい。まず、“コペンハーゲン解釈”とは、認識論的には実証主義であるが、上述の通り、これらの論述は実在主義に“切り換えて”考察を始めている。しかしながら、《観察》時にどの状態が選ばれるか、何が生じるかは、その“解釈”通りと見てとれる。

そして、注視すべきは、「“ものの見方”としてのディアスポラ」でも指摘されていた《態度^{スタンス}》

としてという語法が、ドゥルーズが繰り出す《定住》《ノマド(遊牧民)》においてもみられることである。特に《ノマドとなる》については、その言い様の吟味が先学によって進められ、傾聴に値する批評もなされているが、そもそも「量子力学的な重ね合わせ状態」にある《私》が、あらかじめ、“コペンハーゲン解釈”に則して《観察》されうるであろう典型的な「ひとつの状態」として語られている—そのひとつの状態以外は、《観察》した瞬間に消滅したかのような言い表し方である—ことに留意していなければ、称賛も批判もそして反論も外的外れとなりかねないであろう。《同一的で固定的な/不変的で真なる自我》を退け、ドゥルーズにおいては、「襲」という《潜在的なもの》が《観察》されると、《現実化[“波の収縮”]》によって《その都度生まれ変わってゆく此性》《その場かぎりの個の在り方》が見出されていく。

その《潜在的なもの》にあたることを、さらに深長に《私-あなた》を含めて量子力学的に《重なり合いもつれ合う》状態と説くゾーハーにならえば、この《私-あなた》—さらに推しはかり「ある地点での“居住”状態とその他の地点での“居住”状態—は、ときに過去/故郷を懐かしむ気持ちと片付けられてきた《あり方/状態》を、今、《実在性》を保ち続けていると解釈することを可能にする。なお、「私は私(全ての私の下位自己の統一体)」(ゾーハー 1991, 208)との記述については、「量子力学的な重ね合わせ状態」にあるとみるのなら、《下位》という位階性を暗示する語り方は時宜をえないのではないかとの声もあがろう。

5. 「多“居住”/多アイデンティティ解釈」という読み解き方から

“物理学からの類推より‘考えられるガバナンス’の記述”(谷村 2009)を探った際、はじめに

もふれたように、まず古典力学から推しはかった「ニュートニアン都市ガバナンス」にあっては、その「固相」や「液相」の見方を含め、最初に「不動で不変の“国民国家”という枠組み」を設定し、社会全体を各種「アクター」が織りなす精巧な機械のようにとらえ、人々の「定住」を支える基本法則が世界を支配しているとおおよその考え方を導出した(62)。実際、この推論に通ずる、何とも妙に“しっくりくる”説き明かし方が、おもに【3-4. 「ニュートンのな世界観」から描出される「“居住”状態」や「アイデンティティ」とは】で考察したように、事細やかになされてきた。

なお、ニュートンに相対したライブニッツの“切り口”については、【2-4. いかなる“パラダイム”における問題提起なのか】ならびに【4-4. 「ニュートニアン・パラダイム」に挑む思考にて「“居住”状態」や「アイデンティティ」とは】の各前段で述べてきたように、「移民研究の場こそ再考すべき」との見解や「“ものの見方”としてのディアスポラ」の視座とのつながりを見出せる。

さて、この最終セクションにおいては、そうした論点も心に留めながら、本論文の主要課題である「量子都市ガバナンス」の語義への補筆、さらにはその核心部分である“量子力学的なありよう”の解釈についての検討を進めてみたい。

これまでの考察をもとに、まず「量子都市ガバナンス」とは、「みなし“定住”社会を“近似的”に読み解き、運営してきたニュートニアン・パラダイムを深化させ、複数の“居住”状態/アイデンティティの量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いのありようを、多世界解釈にならい、多“居住”/多アイデンティティ解釈することから思索する都市ガバナンスの提案である」と、ひとまず筆を加えておく。なお、先に述べたように、ここでも“/”とは“and/or”，すなわち“および/または”の意で遣う。

次いで、量子力学と古典力学とのつぎはぎと指摘されるコペンハーゲン解釈から基本的には推しはかってきた読み解き方—「“居住”状態/アイデンティティの蓋然的解釈”—をここに改めて整理し、それにも照らし合わせながら、多世界解釈から類推される記述—「多“居住”/多アイデンティティ解釈”—をさらに練り上げていく。むろん、「“居住”」や「アイデンティティ」という事項をこえた描出を後に案出する必要性が生じることも推測され、この新たな見方は、あくまでもより一層考究されるべき素案である。

■「“居住”状態/アイデンティティの蓋然的解釈」
「“居住”状態の蓋然的解釈」(谷村 2009, 63)に、バージョン・アップをほどこす。

この「“居住”状態/アイデンティティ(個のあり方)の蓋然的解釈」においては、量子力学的に共存している複数の状態/あり方が、「虚構」ではなく「实在(潜在的なもの)」ととらえられる。

しかしながら、調査時には、観察者によっていずれかの「“居住”状態/アイデンティティ」が“確率的”に選び出され、そのひとつの状態/あり方以外はひとまず捨てられる。言うなれば、「“居住”状態/アイデンティティの収縮」が仮定されている。いかに重ね合わせ、もつれ合いが説かれたとしても、実のところ、「既存パラダイム」の延長線上で、観察された(もしくは観察されうるであろう)典型的な「ひとつの状態/あり方」が個々に拾い上げられていく“つじつま合わせ”のアプローチである—観察者にとって“有意でない”状態/あり方は、実質的には虚ろなものやその時限りの瑣末な現象と処理される恐れがある—。

なお、ときに“最たる”状態/あり方が、実体としてのみならず、“スタンス”としての意でも語られることがある。

■ 「多“居住”/多アイデンティティ解釈」

「多“居住”解釈」（谷村 2009, 63）にも、バージョン・アップをほどこす。

この「多“居住”/多アイデンティティ（個のあり方）解釈」においては、量子力学的に共存している複数の状態/あり方の全体を、多世界解釈が説き明かすような—古典論的な実在をこえた—「実在」と考える。

調査時に、どの“居住”状態/アイデンティティの観察者になるかは、各状態/あり方の共存の程度に関係することになる。「“居住”状態/アイデンティティの収縮」は一切考えず、他の状態/あり方も相変わらず共存しているとみる。

あらかじめ設定した見極めたいものだけに着目するという観察者の視座ではなく、ただ込み入った例解とならぬようにとの思いから、とりあえずここに言及した事項を順々に取り上げると、「個人がA地点の“居住”状態とB地点の“居住”状態との重ね合わせ、もつれ合いになっている」ありようでは、調査時に、ひとつの分枝では、観察者はその個人がA地点の“居住”状態にあるとの結果を見る。別の分枝では、同じ観察者が、同じ個人がB地点の“居住”状態にあるとの結果を見る。

また、「個人がXという個のあり方とYという個のあり方との重ね合わせ、もつれ合いになっている」ありようでは、調査時に、ひとつの分枝では、観察者はその個人がXという個のあり方にあるとの結果を見る。別の分枝では、同じ観察者が、同じ個人がYという個のあり方にあるとの結果を見る。

いずれにしても、それぞれの観察者は、自分が唯一の存在だと思っているので、その個人に可能なさまざまな“居住”状態/アイデンティティの中からその結果が見えたのは単なる偶然だと思ってしまう。しかし、「現実」の全体像を見渡してみれば、可能な状態/あり方のすべてが実際に生じているとみる。

なお、ある“居住”状態/アイデンティティが、実体としてのみならず、“スタンス”としての意で主張されても、その他の状態/あり方も絶えず共存していると思考する。

最後に、この考えられる「量子都市ガバナンス（多“居住”/多アイデンティティ解釈）」の要点は、次のようにも説き明かすことができよう。

- ・ ニュートニアン・パラダイムからの論考（その「固相」, 「液相」の見方を含む）でも、ニュートンに相対したライプニッツの路線に通ずる思索でも、「多“居住”/多アイデンティティ解釈」の考える「実在」からは、“作為的”な《観察》によって特定の分枝が選取りられ、読み解かれたものと見てとれる。「量子都市ガバナンス」論は、パラダイム・シフトではなく「パラダイムの深化」であることも合わせて見据えるなら、そうした《観察》に根ざした既存のいずれのガバナンス論も包摂していると推しはかれるかもしれない。
- ・ 人々がみずからのくらしにとって「十分な解」を手に入れるための“闘い”が、まさに「量子力学的に共存している複数の状態/あり方の全体」において展開されていると考えることは、従来とは異なる「問題意識」や「政策的直観」をもたらす。これまで、人々が交渉を進める際の「場/個のあり方」と論じられてきたものは、言うなれば、観察者がこれこそと着目した“際立った”分枝での《物語》づくりにほかならない。《故郷》, 《共同体》, 《歴史》などについても、《重なり合いもつれ合う》状態で「実在」していることを思い起すことで、新たな《抵抗/実践》の思考や「ガバナンス観」が創出されるであろう。
- ・ 「“居住”状態/アイデンティティの収縮」を考えない「量子都市ガバナンス」にあつて

は、ことに公共政策に深く関与する人々は、《観察》しようと試みたこと、その結果として見出したこと、さらには提言しようと考えたことを、「多“居住”/多アイデンティティ解釈」に照らし合わせ、改めて熟慮して補説するように促されよう。

本論文においては、上述の通り、これまでのガバナンス論をさらに深化させるかたちで求められるであろう「量子都市ガバナンス」論の構築にむけて、移動する人々をめぐる論考を手がかりに基礎的な作業を進めてきた。「グローバル化・都市化をすべての人々のために」を絶えず想起しながら、この後は都市・地域開発、そしてむろんガバナンス、さらには国際協力に関わる先覚の論述も踏まえて、検討をより深めていきたい。

■注

- (1) なお、“物理学からの類推より‘考えられるガバナンス’の記述”(谷村 2009)は、英語版(Tanimura 2009)に加え、諸氏のお力添えのもと中国語版(Tanimura 2011)も近刊。清華大学公共管理学院 NGO 研究所長 王名教授をはじめ、関係各位には深く感謝申し上げたい。
- (2) タウヒードについて、板垣雄三(1993, 13)は、「究極の“一”に厳しくこだわる立場であるけれども、その前提には……森羅万象の個性・差異性を認識することが不可避的だということについての徹底的な強調がある」とも説いている。
- (3) さらに近刊の *Digital Diasporas* [デジタル・ディアスポラ](Brinkerhoff 2009, 203, 221-234)においては、サイバー空間に組織されたディアスポラを視野に、移民の受け入れ国、送り出し国、さらには国際開発の実務家などにむけて、同様な趣旨の政策提言が取りまとめられている。

■参考文献

- 足立眞理子 2008, “再生産領域のグローバル化と世帯保持(householding)”, 伊藤るり, 足立眞理子編『国際移動と〈連鎖するジェンダー〉』, pp. 224-262, 東京, 作品社。
- 安里和晃 2009, “ケアの確保をめぐる引き起こされる人の国際移動”, 『現代思想』, Vol. 37 No. 2, pp. 91-105, 東京, 青土社。
- Brinkerhoff, J. M. 2008, “The Potential of Diasporas and Development”, in J. M. Brinkerhoff ed., *Diasporas and Development*, pp. 1-15, Colorado, Lynne Rienner Publishers, Inc.
- Brinkerhoff, J. M. 2009, *Digital Diasporas*, New York, Cambridge University Press.
- ブルーベイカー, R.(赤尾光春訳) 2009, “「ディアスポラ」のディアスポラ”, 赤尾光春, 早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む』, pp. 375-400, 東京, 明石書店。
- カースルズ, S., M. J. ミラー(関根政美, 関根薫訳) 1996, 『国際移民の時代』, 名古屋, 名古屋大学出版会。
- 陳天璽 2008, “漂泊する華僑・華人新時代の越境”, 高原明生他編『越境』, pp. 297-324, 東京, 慶應義塾大学出版会。
- コーエン, R.(角谷多佳子訳) 2001, 『グローバル・ディアスポラ』, 東京, 明石書店。
- ドゥルーズ, G.(財津理訳) 1992, 『差異と反復』, 東京, 河出書房新社。
- ドゥルーズ, G., F. ガタリ(宇野邦一他訳) 1994, 『千のプラトー』, 東京, 河出書房新社。
- エル・タイェブ, F.(村松美穂訳) 2007, “アーバン・ディアスポラ”, 伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う』, pp. 201-233, 東京, 有信堂。
- Esman, M. J. 2009, *Diasporas in the Contemporary World*, Malden, Polity Press.
- 藤田結子 2008, 『文化移民』, 東京, 新曜社。
- 早尾貴紀 2009, “ディアスポラと本来性”, 赤尾光春, 早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む』, pp. 166-206, 東京, 明石書店。
- 広田康生 2006, “トランスナショナルリズムの展開がもたらす地域社会の現在的課題”, 新原道信他編『地域社会学講座 2 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』, pp. 81-97, 東京, 東信堂。
- 板垣雄三 1993, “都市性と比較”, 板垣雄三, 後藤明編『イスラームの都市性』, pp. 3-16, 東京, 日本学

- 術振興会。
- 板垣雄三 2011, “中東と世界の行方”, 『現代思想』, Vol. 39 No. 4(臨時増刊), pp. 24-32, 東京, 青土社.
- 伊豫谷登士翁 2001, 『グローバルゼーションと移民』, 東京, 有信堂.
- 伊豫谷登士翁 2007, “方法としての移民”, 伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う』, pp. 3-23, 東京, 有信堂.
- 伊豫谷登士翁 2011, “グローバルゼーション研究と課題としてのジェンダー”, 栗屋利江, 松本悠子編『人の移動と文化の交差』, pp. 295-312, 東京, 明石書店.
- カプラン, C.(村上淳彦訳)2003, 『移動の時代』, 東京, 未来社.
- 木村自 2009, “離散と集合の雲南ムスリム”, 赤尾光春, 早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む』, pp. 220-257, 東京, 明石書店.
- 駒井洋 2001, “監訳者序”, R. コーエン著(角谷多佳子訳)『グローバル・ディアスポラ』, pp. iii-vi, 東京, 明石書店.
- 駒井洋, 江成幸 2009, “序論”, 駒井洋, 江成幸編『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』, pp. 11-27, 東京, 明石書店.
- 河野稠果 2006, “世界人口の動向と国際人口移動”, 吉田良生, 河野稠果編『国際人口移動の新時代』, pp. 1-24, 東京, 原書房.
- 工藤正子 2008, 『越境の人類学』, 東京, 東京大学出版会.
- Levitt, P. 2001, *The Transnational Villagers*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press.
- リンドリー, デヴィッド(松浦俊輔訳)1997, 『量子力学の奇妙なところが思ったほど奇妙でないわけ』, 東京, 青土社.
- メルレル, A.(新原道信訳)2006, “世界の移動と定住の諸過程”, 新原道信他編『地域社会学講座2 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』, pp. 63-80, 東京, 東信堂.
- Morokvasic, M. 2004, “Settled in Mobility”, *Feminist Review*, Vol. 77, pp. 7-25, Palgrave Macmillan.
- モロクワシチ, M.(本山央子訳)2005, “移動の中への定住”, 『現代思想』, Vol. 33 No. 10, pp. 154-171, 東京, 青土社.
- 中村則弘 2009, “全体結論”, 根橋正一, 東美晴編『移動する人々と中国にみる多元的社会』, pp. 293-319, 東京, 明石書店.
- 小ヶ谷千穂 2009, “送り出し国フィリピンの戦略”, 日本比較政治学会編『国際移動の比較政治学』, pp. 93-113, 京都, ミネルヴァ書房.
- Orozco, M. 2008, “Diasporas and Development”, in J. M. Brinkerhoff ed., *Diasporas and Development*, pp. 207-230, Colorado, Lynne Rienner Publishers, Inc.
- 大塚直子 2002, “ドゥルーズの主体とはなにか”, 『現代思想』, Vol. 30 No. 10, pp. 214-227, 東京, 青土社.
- 佐藤文隆 1997, 『量子力学のイデオロギー』, 東京, 青土社.
- 澤江史子 2009, “移民をめぐるトランスナショナル政治と出身国”, 日本比較政治学会編『国際移動の比較政治学』, pp. 37-68, 京都, ミネルヴァ書房.
- 澤野雅樹 2004, “『差異と反復』ジル・ドゥルーズ”, 『現代思想』, Vol. 32 No. 11(臨時増刊), pp. 214-217, 東京, 青土社.
- Schiller, N. G., L. Basch, and C. Blanc-Szanton 1992, “Transnationalism: A New Analytic Framework for Understanding Migration”, in N. G. Schiller et al. eds., *Towards a Transnational Perspective on Migration*, pp. 1-24, New York, The New York Academy of Sciences.
- 篠原資明 2008, “総論 モダンとポストモダン”, 鷲田清一編『哲学の歴史 第12巻』, pp. 19-46, 東京, 中央公論新社.
- 田嶋淳子 2008, “国境を越える社会空間の生成と中国系移住者”, 高原明生他編『越境』, pp. 223-242, 東京, 慶應義塾大学出版会.
- 竹田青嗣 1990, “ポスト構造主義の挑戦”, 小阪修平他『わかりたいあなたのための現代思想・入門』, pp. 182-193, 東京, 宝島社.
- 竹内薫 2004, 『世界が変わる現代物理学』, 東京, 筑摩書房.
- Tanimura, Mitsuhiro 2005, “Development and Urban Futures”, *The Journal of Social Science*, No. 54, pp. 49-72, Tokyo, International Christian University.
- Tanimura, Mitsuhiro 2006, “Beyond UN-Habitat’s Classic Framework in Urban Development

- Strategies”, *The Journal of Social Science*, No. 57, pp. 275-304, Tokyo, International Christian University.
- 谷村光浩 2009, “物理学からの類推より ‘考えられるガバナンス’ の記述”, 『名城論叢』, Vol. 9 No. 4, pp. 51-66, 名古屋, 名城大学経済・経営学会.
- Tanimura, Mitsuhiro 2009, “Descriptions of ‘Conceivable Governance’ by Analogy with Physics”, *The Meijo Review*, Vol. 10 No. 2, pp. 27-46, Nagoya, The Society of Economics and Business Management, Meijo University.
- Tanimura, Mitsuhiro 2011 (李勇译・程雅琴校), “从物理学类推得出的‘可想象治理’记述”, 王名主编『中国非营利评论』, Vol. 8, pp. 92-115, 北京, 社会科学文献出版社.
- 坪谷美欧子 2008, 『「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティ』, 東京, 有信堂.
- 都筑卓司 2002, 『新装版 不確定性原理』, 東京, 講談社.
- 内井惣七 2007, “量子重力と哲学”, 『現代思想』, Vol. 35 No. 16, pp. 152-165, 東京, 青土社.
- 上野俊哉 1999, 『ディアスポラの思考』, 東京, 筑摩書房.
- 上野俊哉 2000, “ディアスポラ”, 『現代思想』, Vol. 28 No. 3(臨時増刊), pp. 44-47, 東京, 青土社.
- 上野俊哉, 毛利嘉孝 2000, 『カルチュラル・スタディーズ入門』, 東京, 筑摩書房.
- 宇野邦一 2001, 『ドゥルーズ 流動の哲学』, 東京, 講談社.
- 王恩美 2009, “韓国華僑の外なる「故郷」と内なる「祖国」”, 赤尾光春, 早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む』, pp. 258-289, 東京, 明石書店.
- 巖善平 2005, 『中国の人口移動と民工』, 東京, 勁草書房.
- 巖善平 2009, 『農村から都市へ』, 東京, 岩波書店.
- 翟振武, 時金芝他(袁媛訳) 2008, “人口移動のピーク”, 田雪原, 王国強編『中国の人的資源』, pp. 165-215, 東京, 法政大学出版局.
- ゾーハー, D.(中島健訳) 1991, 『クォンタム・セルフ』, 東京, 青土社.